

NOW IS.

宮城は現在も
いま
現実に
立ち向かう。

2018.8.11

Vol.
28
August, 2018

ナウイズ
毎月11日発行

木村拓哉・in 東松島





「日常」から生まれる推進力。
ここに生きる人の強さ。

松島基地司令松尾洋介さん、ブルーインパルスとともに

もう一度出会う
ブルーインパルス

車窓から山並みが遠くに見えます。「ああ、この景色。なつかしいな。薄く雲がかかった暑い一日、木村拓哉さんと東松島市に向かいました。木村さんは2009年にテレビ番組の企画で松島基地を訪れ、ブルーインパルスに搭乗しています。「アクロバットしても酔わなくて、本職のパイロットのようだ」と驚かれました。そのとき操縦してくれたパイロットとは、今もメールする

地域に向かうべきだった救助車両も、津波で使えなくなりました。今は、基地のなかでも特に高い所に駐車しています」と、松尾洋介司令。震災当時は九州で勤務していました。「大変な時期に松島基地に行けないのが辛かった。でもだからこで、自分たちはできる限りの後方支援をしよう」と。時折、離陸する飛行機の大きな音に会話が途切れま

す。あつという間に空の奥に吸い込まれる機体。「ようやくブルーを戻せる環境が整い、松島基地に機体が帰ってきたとき、



負わず、しかし決意を秘めて話す松尾司令の言葉に、耳を傾ける木村さん。考えすぎだったのかもかもしれないなあ」とつぶやきます。「前に来てから今までの間にすごく大変なことがあった。心配でも足を運べない状況にあるなかで、自分はいろんな情報を聞きすぎて、考えすぎていたと思います。実際にここで踏ん



震災当時6年生だった2人。ほぼ最年少の語り部です。

震災に。ピュアに向き合う人々に会う。
木村拓哉さんと東松島へ。

仲です」と木村さんは少し誇らしげ。「また来てうれしい。今日はこれが通行許可証だと思っ

て持って来たんだ。そう言っ

て、ブルーインパルスのマークが入ったキャップを被ってみせてくれました。

松島基地は、津波で大きな被害を受けました。ブルーインパルスは九州のイベントに出ていて被害を逃れたものの、戦闘機や車両は水に浸かり、使えなくなってしまう。震災後、基地は一部をかさ上げし、防潮堤の役割も担います。「本来、周辺



取材途中で立ち寄った野蒜の海で、釣り人と「何釣れるの？」「ラメ？」と会話が弾む。

東松島の地元の方が泣いて迎えてくれたんです。それを見て、ああブルーは地域のものなんだと感じました。自分たちは地域の方々とともにあるんです。気が



東松島市東日本大震災復興祈念公園。東松島で亡くなった方やゆかりのある犠牲者1099人の名前が刻まれている慰霊碑の前で手を合わせる木村さん。

張ってきた松島基地の方々は、すぐピュアに自分のやることを信じている。これが、ここで生きる人たちの本当の姿なんだと思います。

大学生が語る
未来への足し算

松島基地を後にし、旧野蒜駅



語り部ガイドグループTTTの小山綾さんと齋藤菜弥乃さんと一緒に、旧野蒜小学校「キボッチャ」の前で。

へ。被災したプラットホームがそのまま保存され、慰霊碑が建てられています。木村さんは「こういう場所があるのは大事だな」と静かに手を合わせます。「地域の人たちにとっては、これも普段の生活の場所。その空間に被災した駅を残せる強さ、すごいなと思っ」。

旧野蒜小学校では、「TTT」の小山綾さんと齋藤菜弥乃さんが迎えてくれました。「TTT」は東松島市内で当時小学生だった女子たちの語り部ガイドグループ。大学に通う傍ら、視察団体を案内したり、講演会を行ったりしています。一行はまず、齋藤さんの案内で当時住んでいた自宅周辺へ。すべて津波で流され、今は更地。雑草ばかりが生い茂る跡地で「この辺りにはこんな店があつて、買い物に行つた」「海鮮がたつぷりのつたラーメン店があつた」と臨場感たっぷりに思い出を話してくれます。微笑みながらうなずく木村さん。最後にまた旧野蒜小学校に戻り、震災の日、自分たちがどういう行動をとったか話してくれました。「私たちは、震災や地震を経験していない人たちは『未災者』と言っています。日本は地震が多い国。わたしたちの話で現実感を持ってもらい、防災・減災に活かしてほしい」と齋藤さん。小山さんは語り部を始めたときは、泣いてしまつて話せないこともあつた。でも今はもう



木村 拓哉
きむら たくや

1972年東京都生まれ。ジャニーズ事務所所属。俳優、タレントとして活動。東日本大震災後はCMのロケなどで東北を訪れたほか、チャリティ活動などを通して被災地を支援してきた。

沼田佐和子

東松島DAY OUT

HIGASHIMATSUSHIMA

東松島で
休日き

東松島市では松島四大観の「大高森」や日本三大溪の「嵯峨溪」など、海に囲まれた自然景観を展望台や観光船、アクティビティで楽しめます。のどかな風景の中を駆け抜けるブルーインパルスも圧巻です。



ディスカバリーセンター

日本初となるアメリカ海洋大気庁(NOAA)が開発した化学地球儀 Science On a Sphere®を設置。この地球儀は圧巻です！

東松島市東日本大震災祈念公園 (旧野蒜駅プラットフォーム・震災遺構)

松島自然の家

東日本大震災の津波で全壊し、野蒜地区から宮戸地区に移転しました。子ども向けの野外活動施設で、野外炊飯棟や運動場、コテージ棟などがあります。

奥松島体験ネットワーク

現役の漁師から学び漁や船釣り、シーカヤックなど、奥松島の大自然を活かした体験メニューが楽しめます。手ぶらで楽しめるのもうれしいポイントです。

航空自衛隊松島基地



松島基地はブルーインパルスの母基地であるとともに、F-2戦闘機のパイロットを養成する第21飛行隊が所属。その他松島救難隊、松島管制隊、松島気象隊等が属しています。事前に予約をすれば基地見学(平日のみ)をすることも可能。(予約受付は2ヶ月前の月初めから。)

東松島市 東日本大震災復興祈念公園



東日本大震災により甚大な被害を受けた旧野蒜駅のプラットフォームを残す「震災遺構」、震災の記録や復興状況を展示物などで紹介する「震災復興伝承館」、慰霊碑(震災復興モニュメント)がある「祈念公園」で、震災の風化防止や防災意識の醸成を後世に残します。

KIBOTCHA (キボッチャ)



旧野蒜小学校がエンターテイメント(遊び)と教育と防災を融合させた宿泊も可能な防災体験施設に生まれ変わりました。1階はレストランや物産店、大浴場、2階は防災資料館や遊具・体験学習スペースなどを完備。3階は68床の宿泊フロアとなっています。

TSUNAGU Teenager Tourguide of Higashimatsushima



略して「TTT」。2015年5月、高校2年生になった野蒜小学校卒業生6人で立ち上げ、2016年には大曲地区から高校1年生が2人、その翌年に大学生も1人加わり、初期メンバーの一部卒業などを経て、現在は大学生4人高校生2人で活動をしています。写真提供:鈴木貴之

取材
こぼれ話
VOICE
FROM
STAFF

東松島の デカ盛

語り部サークルTTTの2人が「昔からよく食べた!」「おすすめ!」と話してくれた食堂「えんまん亭」。津波で店舗を流されながらも、数回の引っ越しを経て、今も野蒜地区に店を構えています。名物は、エビやズワイガニ、アサリなどが、これでもか!とのった「海の幸ラーメン」。麺が見えないほどの迫力の盛り付けで、地元の方はもちろん、遠方からわざわざ足を運ぶ人も多いそう。心もお腹も満足する海辺の食堂で変わらぬ海の恵みを味わって。



宮城県東日本大震災死者数(関連死含む) 10,566人 | 行方不明者数 1,224人 | 2018年6月30日現在宮城県危機対策課調べ

Support Power

PROFILE

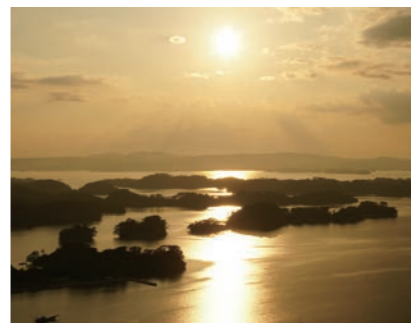
東松島市 建設部 建設課 道路公園整備班
はやし たかふみ
林 敬史 さん
三重県津市より東松島市に派遣

the 応援職員

NOW IS.

東松島

Higashimatsushima



旅行好きで、休日は東北を巡っている林さん。奥松島の風景はお気に入り。



鹿妻駅に展示してあるブルーインパルス。通勤時「これから1日が始まる!」と気持ちが引き締まるそうです。



復興への貢献と、防災・減災への意識向上も。

「宮城県にはちょっとした縁があつて、少しでも復興の一助になれたらという想いがあります」。そう話すのは、2018年4月に三重県津市より東松島市に派遣され、建設課道路公園整備班に所属している林さんです。

林さんは、生まれも育ちも三重県津市。大学院修士課程を卒業後、建設会社にて5年勤務し、その後、三重県津市の職員に。「建設会社の時、2007年に開業した仙台空港アクセス鉄道の建設に携わり、宮城県に滞在していたことがあるんです。東日本大震災時、空港に津波が押し寄せる映像をみて、気が気ではなくて、なにか自分なりに力になれることはないかと思っていました。」

林さんが派遣職員として宮城を訪れるのは今回で2回目。「山元町には2012年に来たのですが、3カ月という短い期間でし

た、東松島市への派遣の打診があつた時には、今度はずっと取り組めると、迷いなく引き受けました。林さんは現在、技術監として、市が発注した道路拡幅工事の監督業務を行っています。工事が契約通り進んでいるか、書類や図面と比較し確認したり、関係機関との調整を図ることが主な業務です。道路の拡幅といっても、あらかじめ電柱や農業用水管の移設が必要で、特に用水管は水田が現在耕作中なので、稲刈りが終わるまで手をつけられないなど、時間がかかりました。

「歩道の幅も広くなるので、災害の際は、避難がスムーズになるなど、防災・減災の街づくりにもつながっています。今後も、復興に少しでも貢献できたらいいなと思っています。」

東松島市に来て、防災・減災について改めて考えた林さんは、東松島市では、新人職員や派遣職員に向けて、毎年防災の研修が行われているんです。こういった取り組みはありがたいですね。津市でも、しっかり伝えていきたいです。大阪府北部地震や西日本豪雨など、甚大な被害が各地で起こっています。いつどこで自分の身に災害が起こるか、それに備えるためにも、防災・減災を日常として意識することが大切ですよ。

info/area

{エリア情報} 復興や防災にまつわるニュースをお伝えします



東松島夏まつり2018

～合言葉は青の街!めざせ!日本一の祭り～
青空に舞うブルーインパルス、多くの海の幸など、東松島市には「青」の魅力があふれています。ブルーインパルスの展示飛行や八幡神輿の練り歩き、花火など、「青」の魅力とともに楽しんでください。
●日時:8月25日(土)10時30分～20時30分
●場所:東松島市商工会前～蔵しっくパーク(メインステージ)周辺
☎0225-82-2088(東松島市商工会)
URL: <http://www.higamatu.miyagi-fsci.or.jp/nm2018/>



松島基地航空祭2018

ブルーインパルスの展示飛行はもちろん、F-2Bによる機動飛行も披露されます。そのほかにも、U-125AやUH-60Jによる救難展示や、展示走行チーム「ブルーインパルスjr」による走行展示など、楽しく刺激的なイベントが目白押しです。
●日時:8月26日(日)8時30分～16時(※入場は14時まで)
●場所:東松島市矢本字板取85
☎0225-82-2111(航空自衛隊松島基地)

今月のガイド MONTHLY GUIDE

TTT TSUNAGU Teenager Tourguide of Higashimatsushima

さいとう まやの おやま りょう
左 齋藤 栄弥乃さん 右 小山 綾さん

巻頭で紹介した「TTT」は、TSUNAGU Teenager Tourguide of Higashimatsushimaの「震災対策」東松島市内の小学生だった女子たちがつづけた学生の語り部です。講演はすでに60回以上、安部首相への講演も8月に予定しています。10代が語り部として活動しているのは宮城県内でも「わずか」自分たちで考えています。

「50年後でも頭を強く自信を持って活動していきたい。気持ちをスタートに表現する彼女たちの語りは、心に深く残ります。私たちの話を聞くことで、日ごろから備える意識を持ってもらいたいです。災害が起こってから役立つ語りではなく、防災は日常的であるべきだと考えています。」

追悼という原点を忘れず、 百年続くような プロジェクトにしたい。



(上) 2018年の様子。子どもたちがつくった、手づくりの鯉のぼりも送られてくる。
(左) 東松島市の震災復興伝承館には、ロックバンドGLAYが寄贈してくれた青い鯉のぼりが飾られている。
(右) 5月5日の当日には、和太鼓の演奏も行われる。

支援が広がる一方、心にとまどいも。

「青い鯉のぼりプロジェクトは、震災後、泥だらけになってがれきに埋まっていたうちの青の鯉のぼりを、当時5歳だった弟のために揚げたのが始まりです。津波でいなくなった家族のために、という個人的な想いで始めたプロジェクトが、こんなにも強く人の心に残るプロジェクトになった。震災の枠を越えて広がっているんだということに心を打たれました。支援の輪が広がるのは、とてもうれしいです。でも、それと同時に、自分の心のキャパシティが追い付いていないようにも感じました。」
「青い鯉のぼりプロジェクト」は、今や東松島市の復興の象徴になっています。テレビや新聞の取材も多数入り、2018年の子どもの日に約1,000人が見学に訪れました。震災直後、「今の自分がやることを」と始めたときと比べて、共同代表を務める伊

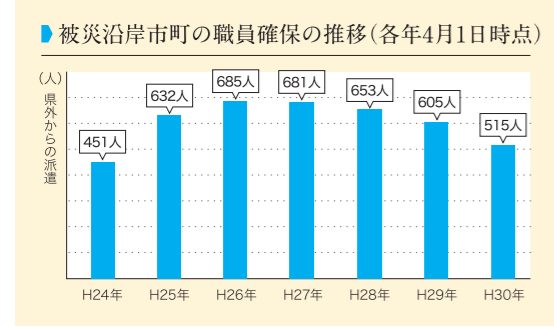
藤さんの業務も多岐に及ぶようになりました。「イベントの企画や段取り、なにかあったときに避難してもらうための誘導路の確保など、ここ数年、やらなきゃいけないことがすごく増えました。この先どうやって進めていけばいいんだろうと、ちょっとフラツとしてしまったんですね。」

自分のためが誰かのために。
支えられながら前に。

そんな伊藤さんを支えてくれるのは、共同代表の千葉秀さんだと言います。千葉さんは和楽器を中心に音楽制作を行うプロデューサー。当時、憧れの和太鼓チームのプロデューサーだった千葉さん宛に「一緒に追悼コンサートで演奏してほしい」とメールしたのが出会いでした。年齢は30近く離れていますが、8年間伊藤さんとプロジェクトを盛り上げています。「開催当日の5月5日も、ぼくが想い

を馳せる時間をつくれるようにと気を使ってくれます。『会場に来た人の想いを汲み取りながら、自分の気持ちを発信すればいいと思う。互いに今できることをしていこう』って、迷っていたばくには『健人は、代表としてみんなを引っ張っていくのも必要だけど、ひとりの家族として、みんなと一緒に進む列の中にいるという気持ちも大切』と言ってきて、ハッとしたんです。自分のためにやっているプロジェクトであっても、それが誰かの希望になって、影響を与えていくんだなって。

回数を重ねるにつれて、東松島市に住んでいた人が来てくれるようになってくるのも、うれしいと伊藤さん。「鎮魂の意味合いが強かったプロジェクトですが、未来に向かう意味合いが増えてきたように思います」。目標は、100年後も続く取り組みにすること。「東松島市にずっと前からあったプロジェクトみたいになるといいですね。原点を忘れず、地に足をつけて続けていきたいと思っています。」



PROFILE
青い鯉のぼりプロジェクト 共同代表
いとう けんじ
伊藤 健人さん
石巻市出身。幼稚園の時、東松島市に移り住む。大学を卒業後、東松島市の任期付き職員を経て、正職員に。現在は税務課に勤務する。子どものころから和太鼓を演奏し、和太鼓ユニット「闇(いぎ)」などで演奏活動を行っている。

01 就職・転職のご相談は「出前ジョブカフェ」へ!

若者の就職支援施設「みやぎジョブカフェ」では、復興支援の一環として、沿岸被災地を含む県内4地域で定期的(月3回)に「出前ジョブカフェ」を実施しています。
面接対策等の就職に役立つセミナーと個別の就職相談が受けられます。また、石巻・気仙沼地域では、出前ジョブカフェ開催日以外にも下記サポートセンターで個別の就職相談を受け付けています。すべて無料でご利用いただけますので(要予約)、就職活動がうまくいかない、転職しようか迷っている、そんな方はお気軽にご利用下さい。詳しくは、みやぎジョブカフェ及び各サポートセンターへお問い合わせください。



就職支援セミナー風景
キャリアコンサルティング(個別就職相談)風景



開催日程等、詳しくはこちら

- みやぎジョブカフェ
☎:022-217-3562 <http://www.miyagi-jobcafe.jp/>
- 石巻サポートセンター ●気仙沼サポートセンター
☎:0120-773-161 ☎:0120-215-488

MEDIA INFORMATION

みやぎ復興情報ポータルサイト
みやぎ復興情報ポータルサイトはコチラから!
<http://www.fukkomiyaagi.jp>

宮城の復興情報を発信する、「みやぎ復興情報ポータルサイト」を公開しています。復興に関するお知らせや復興の進捗状況、復興に向けた取り組みなどを発信します。

最新情報を
ブログで!

今月のブログピックアップ



いわたかれん
復興フォト
岩田 華伶



これまでの被災地訪問は90回を超える岩田さん。「写真」に思いを込めて、被災地の状況を発信しています。今回訪れたのは「名取市」。小さい頃からよく家族で来ている「ゆりあげ港朝市」を巡りました。

宮城発!
元気と食の
最新情報

一般社団法人
IkiZen



このブログでは、被災地企業や団体のさまざまな取り組みを発信しています。今回は、気仙沼市から生まれたコーヒーショップ「アンカーコーヒー」の取り組みについてご紹介します。

詳しくは、「みやぎ復興情報ポータルサイト」内の「NOW IS.復興レポート」をご覧ください。

- いまを発信! 復興みやぎ SNS「いまを発信!復興みやぎ」では、取材チームが見た被災地のいまを発信しています。皆さまからの投稿もお待ちしています。ハッシュタグ「#fukkomiyaagi」をつけて、撮影した画像をお寄せください。
- NOW IS.メールマガジン NOW IS.の発行日(土日・祝日のときは翌平日)にメールでお知らせします。 [NOW IS.メールマガジン](#) で検索して登録!

宮城の「今」を発信



震災の伝承や
防災・減災に取り組む
活動をご紹介します。

「スーパー」チャンネルみやぎ
風化させない“現状と課題”伝え続ける

KHB東日本放送では、被災地の現状と課題などを伝えるシリーズ企画「被災地は今」を2011年12月から「スーパー」チャンネルみやぎで放送し、今年6月で放送回数は200回を超えました。各地のインフラの復興状況などを伝えていた企画は、仮設住宅で暮らす人たちの悩みや人口減少に苦しむ地域の課題などを伝える内容に変わってきています。震災から7年が過ぎ、目に見える形で復興は進みましたが、被災地はまだまだ多くの課題を抱えています。KHBはこれからも「被災地の今」を伝え続けていきます。



2018.8.11

Vol.

28

August, 2018

ナウイズ
毎月11日発行

宮城は現在も
いま
現実に
立ち向かう。

NOW IS.



青い鯉のぼりプロジェクト
伊藤健人

未来の道しるべになった 青い鯉のぼりの輪。

東松島市大曲浜。復興工事のトラックが行き交い、茶色の土煙があがるこの地区には、毎年4月半ばになると全国から寄せられたたくさんの青い鯉のぼりが掲げられます。「青い鯉のぼりプロジェクト」。「津波で命を失った家族4人に想いが届くように、生き残った自分の道しるべになるように」と、震災当時高校生だった伊藤健人さんが始めました。

2011年は約220匹からスタートし、8年目の2018年には約1800匹に。支援の輪はまだまだ広がっています。伊藤さんは、今年支援者から寄せられた一通の手紙が心に残っているといます。「私は家族を交通事故で失いました。この青い鯉のぼりが、私の家族にも届きますように。がんばってくれて、ありがとう」。